

丹陽布衣邵芳考

——政客の活動をとおして見る明代後期の政治世界——

城 地 孝

はじめに

一 「布衣」邵芳と胡宗憲幕府

二 大學士高拱の幕客として

三 暗躍する政客たち

おわりに

はじめに

明の萬曆十七年（一五八九）の進士である王肯堂は、鎮江府金壇縣（現、江蘇省金壇市）の人で、明律の注釋書である『律例箋釋』の撰者としても知られる。彼の隨筆『鬱岡齋筆塵』卷二には、隆慶年間（一五六七—一五七二）に首輔をつとめた高拱の二度目の入閣にまつわる以下のようなエピソードが伝えられている。^①

隆慶初年、内閣では首輔徐階と高拱とが對立し、科道官も巻き込んで激しい弾劾合戦が繰り廣げられた。結局は高拱・徐階ともに内閣を去ることとなり、かわって次輔の李春芳が首輔の座に就いた。^②この頃、免官されて故郷でくすぶっていた數人の士大夫が、再仕官の口を得ようと丹陽（現、江蘇省丹陽市）の邵芳なる人物のもとへ相談に赴いた。邵芳は「これ

はまた難しいお話。李公は慎み深い態度で首輔をつとめており、獵官運動に関わっているような暇はありません。そもそも再仕官を目指すにあたり、誰を黨首に擔いだらよいものか、ここが難しいところだ」と難色を示した。依頼者がなおも頼み込むと、邵芳は「新鄭（高拱）はもう長いこと家居しています。お上も皇子時代からの誼を忘れることができません、彼の窮状を氣にかけてはいますが、側近に帝意を酌んで復歸を働き掛ける者がありません。もし皆様が千金をお出し下さり、この邵芳が間に立てば、高公は必ず復歸できます。高公が復歸すれば、必ずや皆様を重用されるでしょう」と答えた。依頼者は同意し、邵芳は高拱復歸に向けて動き始めたのである。

邵芳は依頼者から得た萬金で奇貨を買い集め、新鄭の高拱の邸宅を訪ねて面會を求めた。最初、高拱は會おうとせず、しばらく邵芳を待たせておいてから面會を許可するというように、甚だ傲った態度で對應した。ところが高拱は、わずかに立ち話をしただけで邵芳に興味を引かれ、屋敷の西隅で陪席するよう求めた。そこで再び話し込むうちにすっかり意氣投合し、ついに高拱は手を握って「吾が老友」と呼ぶまでになる。彼は邵芳を上座に座らせて酒食をともし、夜遅くまで歡を盡くした。

翌朝、邵芳は再び高拱の邸宅を訪ねたが、高拱には會わずに彼の側近に面會する。そこで彼は「私ははじめ高公は豪傑の士と聞いていましたが、いまだ信じられません。昨日ともに語り合つたことは、みなありきたりの話です。なぜその餘力を出して天下のために役立てようともせず、安穩としているのですか」と説いて、高拱の再出馬を促した。側近が「今の側近が引き立ててくれなければ、いくら安穩としていたくなくても、復歸などかありません」と答えると、邵芳は「私はぜひとも高公に復歸してもらいたいです。高公が強いてでも出馬して下されば、二か月もしないうちに京師で會いできますよ」と請け合つた。これを聞いた側近は、いちおう同意はしたものの、内心では本氣にせず、ひそかに嘲笑いを浮かべていた。

新鄭を離れた邵芳は京師に入り、まず人を遣つて「東南から來た大商人のところに、奇寶が澤山ある」と大監たちに振

れ回らせた。珍寶を手に入れようと、太監たちは先を争って邵芳のもとを訪ね、邵芳も持ち前の辯舌で彼らの歡心を買った。太監に寶刀の値段を問われて、邵芳は「丈夫たる者、意氣投合すれば、どうして物の良し悪しを論じたりなどしませうや」と答え、すぐさま寶刀を贈るといった調子である。こうして某太監の信頼を得た邵芳は彼のもとに逗留し、しばらくして高拱の再起用を穆宗に働きかけるよう切り出した。太監は「ご教示のほどはよくわかりました。ただ、お上の側近はたくさんおり、數千金を用立てて彼らに贈らねばなりません。高公は貧しいと聞いておりますが、とても工面できません」と答えた。すると邵芳は「私はもともと高公とそれほど深い關係があるわけではありませんが、こんなことを申しますのも、特に天下のためなればこそ。本當に公のおっしゃるとおりなら、私の囊中の物を出して諸貴人方への心付けといたしましょう」と答え、太監への賂をみずから出すことを承知したのである。かくして高拱は大學士に復歸し、最初に邵芳に依頼した士大夫たちも順次再仕官を果たしたのであった。⁽³⁾

ここに登場する邵芳とは、王肯堂が「元樞の重きも、一起一廢の權は布衣に在り」と述べているように、丹陽縣出身の「布衣」すなわち無位無官の士であった。しかし、上記エピソードによる限り、彼は首輔李春芳のひととなりや穆宗と高拱との關係、あるいは宦官の動向など、中央政界の状況を熟知していたようである。また、家居中の士大夫の方から再仕官の斡旋を邵芳に依頼し、邵芳も金品を受け取ってこれを請け合っていることは、彼が周旋・仲介のプロとして活動し、かつ官僚・士大夫からもそうした存在として認められていたことを示すものであろう。高拱や太監の心をつかむ巧みな辯舌・氣風の良さも、彼のそうしたイメージを支える要素に數えてよいかもしれない。

高拱の再入閣の裏に、邵芳なる布衣の士の暗躍があつたとするこの興味深いエピソードは、實は王肯堂のみならず、ほぼ同時代を生きた王世貞や沈德符も書き残している。⁽⁴⁾ そのことは、單なる風聞として捨置くことのできない何かが、このエピソードに込められていることを示唆しよう。歴史家としての觀察眼には定評のある彼らなればこそ、當時の政治世界のありよう、ないしそこに刻印された明代後期の時代性を象徴する何かを、敏感に嗅ぎ取つたのではあるまいか。とすれ

ば、それは一體いかなるものなのか。

以上のような關心に基づいて、本稿では、一介の無位無官の布衣ながら、政權中樞の大學士の人事をも動かしたとされる邵芳の事跡を跡附け、その上で、彼のような在野の政客とでも呼ぶべき人士の存在が、當時の政治世界において、いかなる位置を占めていたのかを考察する。そうした作業をつうじて、嘉靖（二五三―一五六）中期以降、隆慶（二五六―一五七）・萬曆（二五七―一六二）年間における明朝政界の具體像を描き出すことを、本稿の目的としたい。

ところで、上記の筆記史料などに断片的な記事が残るに過ぎない邵芳について、その事跡をたどる貴重な手掛かりを提示してくれるのが、上海圖書館に所藏される丹陽邵氏の宗譜『邵氏宗譜』である。筆者は二〇〇八年六月に同館の家譜閲覧室において閲覧の機會を得た。當該宗譜は、邵氏三十一世にあたる邵洪吉の纂修にかかり、光緒九年（一八八三）に刊行されている。全二十卷のうち、卷一および卷八上の冒頭部分を缺く殘本であるが、幸いなことに、邵芳の傳記である「養庵公傳」が卷二に収録されている。この傳記は、邵芳の娘婿である沈應奎の手になり、「萬曆歲次丁酉（二十五）年・一五九七）中秋望日」の日附がある。沈應奎は常州府武進縣（現、江蘇省常州市の屬）の人で、萬曆十二年（一五八五）の舉人。後述するように、邵芳が張居正の意を受けて殺された際、族人に殺されそうになった彼の遺兒を救出したという⁽⁵⁾。また、彼が福建汀州府（現、福建省長汀縣）知府時代に、水利事業や勸農を積極的に行い、礦稅太監高案の入境を阻んだこと、その後、葉向高の入閣に伴って南京光祿少卿に起用されたが、魏忠賢が權力を握ると削籍處分を受けたことなども傳えられている⁽⁶⁾。こうした事跡から言えば、沈應奎が東林派に近い人物であったと見て、ほぼ間違いないであろう⁽⁷⁾。

以上に述べた『邵氏宗譜』所收「養庵公傳」に主に依據しつつ、次章以降、邵芳の活動を具體的に検討していくことにしよう。

一 「布衣」邵芳と胡宗憲幕府

「養庵公傳」によれば、邵氏のルーツは、周の成王の時代に燕に封ぜられた邵（召）公奭にあるという。邵氏は代々河朔に住んでいたが、壽卿公邵勳のときに丹陽に遷った。いわゆる丹陽邵氏は、彼をもつてその始祖とする。その後、第三世の邵節が北宋の大中祥符元年（一〇〇八）に進士に登第したのを皮切りに、龍圖閣直學士にまで進んだ邵衡・邵亢を含め、北宋・南宋あわせて合計十二名の進士を輩出した。しかし、第八世の邵衡が南宋の嘉泰二年（二〇二）に登第したのを最後に、邵氏から進士は出ていない。光緒『重修丹陽縣志』卷十四、選舉によれば、明代では嘉靖年間の郷貢に第十二世の邵蕙が、萬曆十三年（一五八五）の郷舉に邵芳の甥で第二十三世の邵位が、それぞれ確認できるのみである。

邵芳の生年は嘉靖七年（一五二八）⁽⁸⁾、始祖の邵勳から數えて第二十二世にあたる。はじめ樗朽と號したが、のちに藝と改名し、號も養庵と改めたらしい。幼くして父を亡くし、母親に育てられ、十三歳で塾師についた。その才能を「養庵公傳」は、

過目せば輒ち成誦し、日に千萬言を記す。課するに博士の制義を以つてせば、程規したがに遵したがわず、多くは創語に由る。里中の長者、嘖嘖として之を稱えて曰わく、此れ邵氏の名駒なり。龍圖・資政の寥寥なるを振したがう者は、必ずや此の子なるべし、と。

と傳えている。一目しただけで諳んずることができ、一日に千萬言を覺えたという拔群の記憶力もさることながら、「制義」すなわち八股文の課題に對して、形式にとられず獨自のことばで表現することが多かったというところに、彼の獨創性をうかがうことができる。先祖のように榮達を果たし、落ちぶれた邵家の再興を期待された邵芳だが、科舉に及第し官僚として出世する上で、その豊かな獨創性は必ずしも助けにはならなかった。邵芳は弟の邵莊とともに科舉に挑んだが、「養庵公傳」には、

邑大夫は其の文を奇とし、高等に拔置するも、會たまま郡伯の諸郷秀を較ぶるに、鋼は昔にして法は峻なり。公は咨嗟太息し、乃ち其の仲君に語りて曰わく、……吾と若なんじとは、奚なんぞ此の區區たる名に紐ひりて障さるを爲さんや、と。是に于いて、其の弟を率いて歸りて門を杜ふぎ、褐きを衣きて糲なを羹なとし、殫日丙夜、悉く其の先世の藏する所の書を讀み、津津として自ら喜ぶ。

と傳えられている。邵芳は縣試では上位合格を果たしたが、府試では知府の採點基準が厳しかったために落第したのである。これを機に邵芳は、科擧及第という名譽を求めのをやめ、布衣として生きることを決意し、家にこもって讀書三昧の日々を送った。先祖傳來の書物を讀破したのみならず、「養庵公傳」に、

公は少わかき時、嘗て捐金して奇書を市かう。一切の韜鈴・靈祕の籍、風鳥・占驗の家に於けるまで、精究せざる靡なし。とあるように、兵法・祕術から風水・占卜に至るまで、あらゆるジャンルの書物を買集め、精通しないものはなかったという。

邵芳の學問的な素地として、いま一つ「養庵公傳」が擧げているのが、羅洪先・唐順之との交流である。兩者とも嘉靖八年（一五二九）の進士で、羅洪先は狀元、唐順之も同年の會試をトップで合格した。ところが彼らは嘉靖十九年（一五四〇）十二月、元旦の朝賀への帝の出御と皇太子の出閣とを求めの上奏を行つて世宗の勘氣に觸れ、爲民處分を受けたのである。彼らは王陽明の良知の學にも造詣が深く、免官後は講學活動にも力を注いだとされるが、この間のこととして「養庵公傳」には、

時に念菴羅先生（羅洪先の號は念菴）・荆川唐先生（唐順之の號は荆川）、豫章・毘陵の間に倡道し、重山の斗學を望む。……特に公の行誼を慕い、相あい締むすびて布衣の交わりを爲す。公、是に由りて兩先生と與ともに、性命を談説し、道德を砥礪す。

とある。江西吉水縣（現、江西省吉水縣）出身の羅洪先・常州府武進縣出身の唐順之が、郷里で學を講じていた間に、邵芳

の品行を慕って布衣の交わりを結んだという。また「性命を談説し、道德を砥礪す」というのも、ややもすれば字面から連想されるような、現實から離れて思索を深めるというものではなかったはずである。周知のとおり、「心即理」を標榜する王陽明の良知の學は、内憂外患が深刻化する中で、現状への憂慮・憤りを募らせる人々の心を後押しし、實際の行動に踏み出すための據り所を與えるものとして、爆発的な流行を見せたのであった。『明史』所收の羅洪先・唐順之の傳記には、兩者とも兵學をはじめ天文・禮樂・地理から數學・占卜に至るまで、およそ究めないものはなかったとあるが、彼らのこうした幅廣い學識も、如上の思想状況を背景として、すぐれて現實的な關心に裏打ちされたものだったのである。先行研究でも指摘されているように、特に彼らが軍事に對して抱いていた強い關心も、いわゆる「北虜南倭」の脅威に觸發されて深められたものに他ならない。⁽¹¹⁾科擧の受験勉強に飽き足らず、あらゆるジャンルの書物を読みあさったという邵芳も、おそらくは同様の問題意識を共有しつつ、羅洪先・唐順之との交流をつうじて、みずからの學問を深めたのであろう。

改めて言うまでもなく、嘉靖後半期の東南沿岸地域では倭寇が猖獗を極めていた。いわゆる嘉靖大倭寇の侵掠に搖れる當時の状況について、「養庵公傳」には次のような興味深い記述が見える。

未だ幾くならずして、島夷構難す。……是に于いて、甘泉に坐して廟算を佈し、通侯の賞を懸け、尙方の金錢を犖びて、之を幕府に輸し、一に專闡するを聽す。授鉞者は處分問う毋し。海内の豪勇忠智の士、咸な當得に行間に尺寸の功を堅て、大難を定むべきを願う。公も是に于いて義憤激烈なり。

倭寇對策として、中央政府は手柄を立てた者には通侯の賞を與えることとし、前線の幕府に銀兩を發給するとともに、督撫に相應の裁量權を與えた。これに對して天下の「豪勇忠智の士」は發奮し、みな軍中で功を擧げて國難を平定せんと願い、邵芳もまた激しい義憤を感じたという。書き手である沈應奎の意圖は、中央政府が倭寇對策に本腰を入れ、それに呼應して人々がやむにやまれぬ義憤に驅られて奮起するさまを、肯定的に描こうとするものであろう。ただ、うがった見

方をすれば、懸賞金として懸けられた賞賜、あるいは前線に軍資金として發給された銀兩が、一攫千金を目論む人士たちを驅り立てたという状況も、ここには示唆されているのではあるまいか。當然ながら邵芳も含まれるであろう。「豪勇忠智の士」たちのきわめて投機的な一面をうかがわせるといふ點で、この記事は非常に興味深く思われるのである。

こうした中で邵芳は、嘉靖三十五年（一五五六）六月に鳳陽巡撫となった蔡克廉に請われ、軍師としてその幕下に參ずる。⁽¹²⁾翌三十六年（一五五七）三月に蔡克廉は戸部右侍郎に遷るが、その際に邵芳も蔡のもとを辭し、母親に仕えるために歸郷する。そこへ届いたのが、軍師として迎え入れたいという總督胡宗憲の要請であった。はじめは任に堪えずと斷つていた邵芳も、何度も使者をよこし、北面して師事するとまで言う胡宗憲の熱意に折れ、ついに入幕を承諾したのである。⁽¹³⁾軍師として迎えられた邵芳は、さっそく倭寇擊退に知恵を絞る。倭寇が勝ちに慢心していると踏んだ邵芳は、諸將に計略を授け、敵を奥深くまでおびき寄せて挾撃するという戦法で連戦連勝を収めた。これによって明軍は息を吹き返し、士氣も高まったといふ。⁽¹⁴⁾

また、倭寇の首領のひとりである徐海の捕縛に成功したのも、邵芳の計略によるものであったと「養庵公傳」は傳えている。徐海が王翠翹という妾を圍っていることを知った邵芳は、部下に命じて、外夷と私通した罪で彼女の父親を告發させた。かねて邵芳と打ち合わせていた胡宗憲は、再三にわたって父親の罪を赦し、これによって父親は胡宗憲に恩を感じ、軍中で死戦せんと願った。しかし胡宗憲はこれをとどめ、そのかわり娘に血書を送って内通を促すよう命じた。かくて計略は成功し、結局、徐海はみずから投降してきたといふ。⁽¹⁵⁾

さらに、胡宗憲の倭寇対策と言えは必ず言及される「倭寇王」王直の招撫についても、「養庵公傳」では邵芳の發案とされている。すなわち、追ひ詰められたとはいえ、生死を誓う數萬の兵を擁する王直を力づくで捕えるのは無理だと見た邵芳は、王直が胡宗憲との同郷の縁を恃みにしているのを利用して、通侯の賞を與えて彼を招撫するよう獻策し、胡宗憲もこれを容れて上請した。これによって王直は胡宗憲の軍門に降り、戦火を交えることなく浙江を平定したとされている。⁽¹⁶⁾

以上の「養庵公傳」の記述、特に徐海・王直の捕縛がすべて邵芳の發案・獻策にかかるという点については、宗譜所收の傳記という史料の性格からして、顔面どおりに受け取ることに慎重でなければなるまい。ただ、胡宗憲の孫にあたる胡焯が、祖父の功績を後世に伝えるために編纂した『五忠堂平倭實錄』卷二には、王直招撫の顛末を記す「擒獲王直末」なる一文が収録され、これが邵芳の作とされている。この文章は『籌海圖編』卷九、大捷考所收の撰者不明「擒獲王直」とほぼ同じ内容である。『籌海圖編』の當該卷所收の文章は、茅坤・徐渭などいずれも胡宗憲幕下の人士の手になるものであり、幕下の文人に機械的に執筆を割り振った結果、たまたま邵芳が王直招撫について書いたという可能性は排除しきれない。しかし、王直招撫が胡宗憲の一連の倭寇對策の中でも重要な位置を占めること、また、邵芳が參謀として重きをなしていたことから言えば、彼が「擒獲王直本末」を書いた裏には、計畫立案に主導的な役割を果たすなど、相應の積極的な理由があったと考えたい。

邵芳が胡宗憲幕府において重要な位置を占めていたことは、彼が『籌海圖編』の編纂に深く関わっていたことによっても知られる。言うまでもなく『籌海圖編』は、胡宗憲幕府が生み出した最大の成果にも数えられる有名な海防書であるが、この中に邵芳の獻策が採録されているのみならず、⁽¹⁸⁾「嘉靖辛酉（四十年・一五六一）冬十有二月朏日」の日附を附す「籌海圖編序」の中で、編者の鄭若曾が、

宛委を傾發し、義例を商訂するに、則ち丹陽の邵君芳の力は居多なり。邵君は經濟の負を有するも、隠れて未だ試せず。少保公（胡宗憲）の器重して賓禮する所の者なれば、因りて面命して其れ相い切磋するを得と云う。

と記しているのである。邵芳の入幕の経緯に觸れつつ、事の委曲を明らかにし、本書の趣旨・體例を定めるに當たって、邵芳の力によるところが大きかったということは、ともに胡宗憲幕下の同僚であった編者鄭若曾自身のものであるだけに、信のおけるものと言えよう。

胡宗憲幕下での邵芳について、いま一つ重要なこととして、ともに幕下にあった官僚との關係について觸れておかねば

なるまい。「養庵公傳」によれば、入幕直後、邵芳は胡宗憲に幕下の文武官との面會を求め、このときに譚綸・胡松らの文官、戚繼光・劉思顯・俞大猷らの武官と面識を得たが、その後、彼らの方から、胡宗憲幕下での縁を頼って、邵芳に獻策を求めに来ることがしばしばあったらしい。浙江での倭寇が下火になった後、いわゆる嶺南海寇の活動が活発化する。

廣東饒平縣（現、廣東省潮州市の屬）の張璉の活動が記録に登場するのは、嘉靖三十九年（一五六〇）のことだが、やがてその攻掠範圍は、廣東から福建・江西の諸縣に及んだ。⁽²⁰⁾ こうした事態を受けて中央政府は、嘉靖四十年（一五六一）七月に江西巡撫に昇任した胡松にその鎮壓を命じたが、「養庵公傳」に、

天子は柏泉胡公中丞に命じて、節鉞を假し、往きて之を征せしむ。胡中丞は馳^{かむ}き、公と司馬の幕中に習えば、決策を請いて、張璉を破らんとす。

とあるように、胡松は胡宗憲幕下での縁を頼って、邵芳に獻策を求めたのである。これに對して邵芳は、張璉の軍勢は所詮烏合の衆であり、威望あきらかな胡松が「十萬の兵がすぐにでも集まる」と檄を飛ばせば、それだけで敵は戰意を失い、總崩れになると答えた。胡松は喜んでその策を容れ、張璉らも邵芳の見込みどおりに平定されたという。⁽²²⁾ そして、この成功もたらした影響について「養庵公傳」には、

是れ自りして、中丞は南司馬・北大冢宰に晉^{すす}むも、毎に公に兄事して、公の名は益ます公卿の間に重んぜらる。繼いで中丞もて閭に鎮^よする者は、二華譚公なり。公の闈に坐して、決策を咨請すること、猶お之を梅林・柏泉のごとくするなり。

と見える。胡松はこの後、南京兵部尙書・吏部尙書に遷るが、⁽²³⁾ その後も事あるごとに邵芳に兄事したとされ、同じく胡宗憲幕下にあった譚綸も、胡宗憲・胡松と同様に、福建巡撫になってからも、邵芳のもとへ出向いては獻策を求めたという。⁽²⁴⁾ いま一つ、この記事で注目したいのは、胡松が常に邵芳に兄事したことが、官界において、邵芳の名をますます高からしめたという點である。これを足掛かりとして、邵芳は官界での人脈を築いていくのだが、彼と親交を結んだ者として「養

庵公傳」に名前が記されている者を挙げると、羅汝芳・陶大臨・魏良弼・王宗沐・茅坤・董份とは「金石の交」を結んだとあり、秦鳴雷・萬浩・馬森・汪道昆・凌雲翼・嚴訥・李春芳・張位・劉世延は、邵芳の文才・德行を高く評價したと傳えられている。このうち、嚴訥・李春芳・張位は大學生にまで昇進しており、董份・秦鳴雷・馬森・凌雲翼も尙書を歴任するなど、⁽²⁶⁾いずれも錚々たる人士であった。このほかにも、名前を列挙できないほど数多くの人士と交流があり、その様子は邵芳の家刻に収録された文章からうかがえるというのが「養庵公傳」の記述であるが、⁽²⁷⁾いずれにせよ邵芳が、大學士・尙書などの高官を含む幅廣い人脈を築いていたことは、以上によって明らかであろう。冒頭の王肯堂『鬱岡齋筆塵』の記事に見られたように、邵芳が中央政界の状況について、きわめて詳細な情報を得ていたというのも、こうした人脈を見ればうなずける話である。我々はここに、官の身分は持たなくとも、みずからの知謀によって官僚の信頼を勝ち取り、そこから官界での人脈を広げて政治に關與するという道が存在する、ある種の開放性を持った政治世界のありようを具體的に見る事ができるであろう。

それと同時に、邵芳が官界の人脈を形成する足掛かりとして、胡宗憲幕府の重要性に注目しないわけにはいかない。官僚たると布衣たるとを問わず、有能な人材が集まり、それぞれがみずからの能力を存分に發揮できるといふ闊達な雰囲気は、これまで見てきた邵芳の活動からも、その一端をうかがうことができようが、そうした幕府のありようは、當時の人々の目にも何かしら特異なものとして映っていたようである。沈德符『萬曆野獲編』卷十「四六」に、

嘉靖の間、倭事旁午なるも、主上は祥瑞を酷喜す。胡梅林、南方を總制し、報捷獻瑞する毎に、輒ち四六の表を爲し、以って天顔の一啓を博す。……故を以って、東南の才士、縉紳は則ち田汝成・茅坤の輩、諸生は則ち徐渭等、咸な幕下に集まること、羅隱の錢鏐に於けるを減ぜず。此の後、大師の軍中に、亦た絶えて此の風無きなり。

とあり、⁽²⁸⁾田汝成・茅坤・徐渭といった一流の文人を擁する幕府を「これ以後の督撫の軍中に、こうした風潮は絶えて見られなくなった」と評した沈德符のことは、そうした同時代人の認識を端的に物語っている。しかもそれが單なる詩文

サロンとしてのみならず、何かと縁起をかつぐ皇帝世宗に、戦勝・瑞祥を報告する上表文の作成という實際上の業務を擔っていたと沈德符が書き記していることにも注意しておきたい。

幕府全體の様子を伝えるもののみならず、胡宗憲のブレインとして活躍したとされる個々の人士の事跡を伝える記事も、少なからず見出すことができる。たとえば、浙江鄞縣（現、浙江省寧波市）出身の沈明臣なる人物について、屠隆「沈嘉則先生傳」（『由拳集』卷十九）には、

沈明臣、字は嘉則、四明の櫟社の人なり。……父文禎は賈俠なるも、賈を用って敗れて、先生は窮巷より起つ。……世廟の時、東方の兵興り、督府尙書胡公、幕下に辟置す。先生は諸生なりと雖も、顧つて時時に公と與に拉掌して黄石を談じ、獨だ筆札の役を供するのみならず。

とある。商人の息子に生まれた沈明臣は、胡宗憲の幕下で單なる事務仕事をこなすだけでなく、ともに兵書について論ずるなど、ブレインとして重きをなしたという。沈明臣はこの後、首輔徐階の門下に入りしと伝えられるが、彼と同様に、胡宗憲幕府を辭した後に首輔の幕客となつた者として有名なのは、首輔嚴嵩とその子嚴世蕃の下に參じた羅龍文である。嚴嵩が胡宗憲の後盾であつたことはよく知られているが、羅龍文が嚴嵩父子の幕下に入った経緯は、沈德符「萬曆野獲編」卷十八「劇賊遁免」に、

嘉靖の末年、徽人羅龍文なる者有り。素より俠名を負う。……且つ家は素封にして、鑿古を善くす。胡梅林少保、倭を征するに、郷曲なるを以つて厚く之を禮し、汪・徐の諸酋を招徠せしめ、實に勞勤有り。敘功に因り、中書と爲りて内閣に入るを得。

と伝えられている。羅龍文が徽州の素封家に生まれ、古物鑑定を善くし、嚴嵩父子の骨董収集にも一役買っていたことは、すでに先行研究でも指摘されているが、そのほかにも、彼は俠士としてその名を知られており、同郷の縁をもって胡宗憲に迎えられ、王直・徐海招撫の功により、中書舍人として内閣に入ったという。次章で述べるように、邵芳も胡宗憲失脚

後に高拱の幕下に参じ、その再入閣を畫策することになるのだが、以上に提示した史料から見れば、胡宗憲の幕府は、倭寇という現實問題に對峙する中で鍛え上げられた文武の俊才を政界に送り出すというように、あたかも人材の集散地として機能していたかの觀がある。

こうした幕府を維持できた要因は様々に考えられようが、前引史料の中で、沈明臣が商人の家に生まれ、その父親が「賈俠」とされていたこと、羅龍文もまた徽州の素封家に生まれ、自身も俠士として有名であったことには注目したい。胡宗憲自身が徽州績溪（現、安徽省績溪縣）の出身であることを考えれば、あるいは新安商人をはじめとする商人層からの資金が、胡宗憲幕府の經濟的基盤を提供するとともに、その活動にも一定の方向性を與えたのではあるまいか。⁽³²⁾ そうした資金は、中央から發給される銀兩とも相俟つて、目前の危機的状況への憂慮・危機感に驅られて發奮する「俠士」たちをおおいに惹きつけるものであつたに違いない。そしてこうした環境は、邵芳にとつても、その獨創性に富んだ豊かな才能を發揮するに打って附けの場であつたと言えよう。

二 大學士高拱の幕客として

多士濟々のユニークな幕府を擁して、倭寇對策に功績を挙げた總督胡宗憲であつたが、その庇護者であつた首輔嚴嵩失脚のあおりを受けて、嘉靖四十一年（一五六二）十一月に失脚に追い込まれた。南京戶科給事中陸鳳儀が胡宗憲の「欺横貪淫の十大罪」を彈劾したのを受けて、吏部は巡按御史に尋問させるよう覆奏し、世宗も胡宗憲の身柄を京師に護送して取り調べるよう錦衣衛に命じたのである。⁽³³⁾ このときの状況を「養庵公傳」は、

尋いで司馬を伎む者有り、司馬を速え、闕下に至らしむ。司馬の賓客僚屬は、故に輻輳し、承沫仰流するも、緹騎の北方より來たれば、則ち驚怖して散去す。獨り公のみ屹然として單騎を策し、公（胡宗憲）に従ふこと千里なり。會たま温諭有りて、司馬を釋せば、公、遂に南還す。……一時、朝野の薦紳、咸な謂わく、公は子房の鴻略、仲連の高

誼有り、と。

と傳えている。胡宗憲幕下の數多の幕客たちは、錦衣衛の捕吏がやって来るや否や、蜘蛛の子を散らすように逃げてしまったが、邵芳はひとり胡宗憲につき従い、胡宗憲を釋放するという上諭が出たのを見届けてから歸郷したという。⁽³⁴⁾ こうした邵芳の行動は、朝野の官僚・士大夫から「張良の知謀と魯仲連の徳行とを兼ね備えている」という賞賛を集めたのである。⁽³⁵⁾ そして、冒頭に掲げた『鬱岡齋筆塵』のエピソードに登場する高拱も、そうした人士の中の一ひとりだったのである。「養庵公傳」によれば、高拱が邵芳を知ったきっかけは、邵芳が胡宗憲のために代作した文章であった。これがおおいに世宗の意にかなない、高拱もその文才を稱賛したが、後にそれが邵芳の手になるものと知り、高拱は邵芳との交際を望んだという。⁽³⁶⁾ さらに、邵芳が布衣の身ながら胡宗憲に連座するのを厭わなかったことに、高拱はおおいに感じ入り、生涯彼に師事せんと願った。交流を結んだ二人は、すぐに肝膽相照らす仲になったと傳えられている。⁽³⁷⁾

その後、高拱は首輔徐階との抗争の末、大學士の職を解かれて歸郷するが、邵芳が高拱の幕下に參じたのはこのときであった。「養庵公傳」には、

新鄭歸りて、一介に公を田間より速く^{まゝ}。交は漸く進み、語も漸く深まり、扼腕睥睨して、直ちに驟帝馳皇し、豎立する所を多くせんと欲す。

とあり、新鄭に歸郷した高拱はただちに邵芳を迎え、ともに語り合うにつれて、政界復歸への強い意欲を示したという。高拱の方から邵芳を招いたとする「養庵公傳」のこの記述は、宗譜所收の傳記という史料の性質によるものである。本稿冒頭で引用した王肯堂のほか、王世貞・沈德符は、いずれも邵芳の方から高拱に接觸したと記している。おそらく實際のところは、政界への返り咲きを狙う高拱と、胡宗憲という幕主を失って新たな活動の場を求める邵芳という兩者の思惑が一致した、というところであったのだろう。

高拱の大學士復歸に際して、邵芳が具體的にどう関わったかという点について、「養庵公傳」には直接の言及は見られ

ない。ただ、本稿冒頭で紹介したエピソードが傳えるように、邵芳が太監に賄賂を贈って高拱を復歸させたという話は、王肯堂・王世貞・沈德符の三者が共通して傳えている。王肯堂は具體的な名前は擧げていなかったが、王世貞・沈德符によれば、この太監は陳洪であつたらしい。陳洪は河南許昌（現、河南省許昌市）の出身で、隆慶初年に司禮監の事を掌り、同じく河南出身の高拱と結んで絶大な權勢を振るつた人物であるが、沈德符『萬曆野獲編』卷八「邵芳」には、邵芳が高拱からの心附けと稱して、太監たちに珍寶を贈つたという話に續けて、

……時に大璫陳洪、故より高「拱」の厚くする所なれば、因りて司禮の掌印なる者に賂して、新鄭を家より起こし、且つ兼ねて吏部を掌らしむ。……陳洪なる者も、亦た邵「芳」の謀を用い、代わりて司禮の印を掌るなり。

とあり、高拱の再起用のみならず、陳洪が司禮掌印太監のポストを手に入れたのも、やはり邵芳の策謀によるものであつたと傳えられている。

こうして外廷・内廷の雙方のトップに恩を賣つた邵芳は、彼らの威光を笠に着て相當あくどく立ち回つていたらしい。その様子を、王世貞『弇州史料後集』卷三十五「嘉隆江湖大俠」は、

兩人は邵「芳」を徳とし、之を燕中に縱ちて、官爵を市わしむ。居間に納賂するは、且れ贅えず。新鄭も亦た厭いて、其の口を畏るれば、乃ち僞りて之を兩廣の帥なる者に薦むと爲し、官は把總の名色を以つてし、金緋を披らしめて、久しくして則ち之を逐う。樗朽歸り、益ます不檢なり。前後に得る所の金は、多くは之を倡優・陸博に費やして、至る所で守令の長短を把持し、大言して忌む無し。

と傳えている。高拱・陳洪は邵芳に頭が上がらず、彼に北京で官爵の賣買をやらせたため、邵芳は莫大な賄賂を得たという。その悪辣ぶりと巧みな辯舌は、高拱にも疎まれるところとなり、最後には兩廣總督に推薦するという名目で、體よく放逐されてしまった。その後も邵芳の放埒ぶりは収まるところを知らず、得た金は遊興・賭博に費やすのみならず、至るところで知縣・知府の弱みを握って壓力をかけていたらしい。高拱の幕客としての邵芳については、その事跡を好意的に

記す傾向が明らかな「養庵公傳」でも、

蓋し公の新鄭に受知されて自り、相里の人も微かに反唇す。新鄭退きて、公の諸昆曰わく、新鄭進みて、公は其の怨を任い、徳を任う者は、百に二三も無きなり、と。

と述べられている。高拱の引き立てを受けてからは、同郷の者も邵芳に不満を感じており、高拱の失脚後、邵芳の兄たちは「高拱再入閣後の邵芳は、人の恨みを引き受けるばかりで、徳とされたことはほとんどない」と語っていたという。宗譜所收の傳記にもかかわらず、こうした否定的な評價が記されているところに、邵芳の悪辣ぶりのほどを見て取ることもできよう。その一方で、高拱の幕客としての邵芳について、なぜそのマイナス面のみが、かくまでに強調されるのかという点についても考えておかねばなるまい。王世貞が記すように、邵芳が官爵の賣買によつて賄賂を貪つたり、地方官の弱みを握つて壓力をかけたたりすることができたのも、前引『萬曆野獲編』に述べられていた如く、彼の幕主である高拱が吏部尙書を兼任していたからであろう。また、邵芳の兄たちが語つたということばかりも、幕客という立場であるがゆえに、高拱の陰でもつばら汚れ役・怨まれ役に徹せざるを得なかつた邵芳の姿が見えてくるのではなからうか。そう見ると、邵芳の悪辣ぶりを伝える諸史料の記述からは、むしろ官僚が表立つてはできないことを、布衣たる幕客が引き受けるといふ關係が浮かび上がってくるように思われるのである。

いま一つ、幕客としての邵芳の一面を伝える記事として、沈德符『萬曆野獲編』卷八「邵芳」に、

又大金壇の于中甫比部、余の爲に言うに、邵「芳」は書室に於いて、別に一小屋を設け、榜に曰わく、此れ機密を議す處なれば、來たる者は擅入するに到らず、と。此等の舉動、安んぞ敗れざるを得んや。

とあるのを提示しておきたい。ここに言う于中甫とは、萬曆十一年（一五八三）の進士で、刑部の主事・員外郎をつとめた于玉立（中甫は字）のことである。沈德符は彼から聞いた話として、邵芳が書室とは別に、機密事項を議すためと稱して、専用の「小屋」を設け、餘人が勝手に入るのを禁じていたと傳えている。沈德符・于玉立の意圖は、邵芳が刑死とい

う最期を遂げた原因が、こうした出過ぎた振る舞いにあったというところに置かれていようが、そうした意圖は別として、邵芳が官僚のブレインとして、ある種の専門性をもって活動していたことを、この記事から読み取れるのではなからうか。本稿冒頭で觸れた『鬱岡齋筆塵』の記事で、家居中の士大夫の方から邵芳のもとへ依頼に向き、その見返りに金品の授受が行われていたことから、周旋のプロとしての邵芳の立場は廣く認識されていたのではないかと述べたが、沈徳符が傳える専用の「小屋」の存在も、邵芳のそうした一面をうかがわせる事實として指摘しておきたい。

さて、隆慶六年（一五七二）六月、穆宗の崩御に伴う政争に敗れて高拱は失脚し、邵芳も、高拱を追い落として首輔となった張居正の差し金で、刑死に追い込まれることとなる。邵芳の死については、彼の甥にあたる邵位の傳記「潯州公傳」（『邵氏宗譜』卷二）の冒頭に、⁽³⁹⁾

長公（邵芳）は才を以つて新鄭に取重せらるるも、即ち才を以つて江陵に忌まる。厥の後、新鄭の相を罷むるは、江陵、實に陰かに之に中つるにして、長公の難も隨いて作る。密かに其の旨を以つて、應天軍門銅梁張某（張佳胤。四川銅梁縣の人）に授け、又た里中の險説に、従いて爲に網を下す有れば、長公も遂に奇禍を得。

とある。邵芳の才を憎んだ張居正が、應天巡撫の張佳胤に意を含め、また、里中にも邵芳を陥れようとする悪者がいたため、邵芳は死に追いやられたのであった。⁽⁴⁰⁾

しかし、布衣の身をもって活躍した邵芳の事跡は、その最期の悲惨さも手傳つてか、その後も各所で語り繼がれていった。『邵氏宗譜』所收の傳記に、先祖を顯彰する文脈で、邵芳の事跡に言及するものが散見されるほか、光緒『重修丹陽縣志』卷二十六、列女傳に「邵方婢」が立傳されているのは注目に値しよう。その内容は、彼女が邵芳の遺兒である邵儀を守り抜いたことを顯彰するものだが、地方志に關係のエピソードが収録されるということは、邵芳を語り繼ぐべき存在とみなす認識が、邵氏一族のみならず、丹陽という縣のレヴェルにまで浸透していたことを意味しよう。

以上二章にわたって、主に『邵氏宗譜』所收の「養庵公傳」によりながら、邵芳の事跡をたどってきた。科擧の試験勉

強に飽き足りない豊かな才能を持つ邵芳は、府試での落第を機に官途につくの放棄し、布衣として生きる道を選んだ。その後、軍事を含むあらゆる分野の書物を讀破し、すぐれて現実的な關心をもつて諸學を修めるとともに、良知の學に通じ、講學活動にも熱心であつた唐順之・羅洪先との交流の中で、みずからの學問を深めていった。おりしも倭寇の侵攻に搖れ動く状況下で、人一倍激しい義憤を感じたという邵芳は、蔡克廉・胡宗憲に軍師として迎えられ、實際に倭寇問題と對峙する中で、その才能を存分に發揮する。富と人材が集まる胡宗憲幕府は、彼の才能に見合つた活躍の場を與えると同時に、邵芳が官界で活動するための足掛かりをも提供した。それがすなわち胡宗憲の幕下にあつた胡松・譚綸といった官僚との關係であり、彼らからの信賴・評價が官界における邵芳の評判を高め、ついには大學士・尙書クラスの高官を含む幅廣い人脈を築いたのである。胡宗憲の失脚後、邵芳は高拱の幕下に參じ、その再入閣を實現するとともに、吏部尙書を兼任した高拱の陰で、いわば汚れ役を一手に引き受け、ブレインとして一種の専門性をもつて活動していた。しかし高拱の失脚に伴い、そのライバルであつた張居正の差し金によつて、刑死に追い込まれる。ここまでの検討から明らかになつた邵芳の事跡は、以上のようにまとめることができよう。

邵芳のように、官の身分を持たない布衣の身ながら政治の世界で活躍し、時に政治を大きく動かす力を發揮した人士の例は、實は同時代の史料に少なからず確認することができる。邵芳の事跡を當時の政治世界の中に位置付けていくためにも、こうした政客とも呼ぶべき人士の活動について、章を改めて検討することにしよう。

三 暗躍する政客たち

邵芳のエピソードが高拱の再入閣と絡めて伝えられていたように、彼のような政客の活動は、官僚のトップである首輔の任免と關わつて語られることが多いようである。ここではまず、夏言・高拱という二人の首輔の失脚に關わつたとされる呂光のエピソードから見ていこう。王肯堂『鬱岡齋筆塵』卷二、および沈德符『萬曆野獲編』の雙方に、以下のような

記事が伝えられている。

呂光は浙江崇德縣（現、浙江省桐鄉縣の屬）の人。若いころに殺人を犯してオルドス（河套）に亡命したが、この間に當地の天險要害の状況について詳細な情報を得た。恩赦によって京師に戻った呂光は、自身の見聞に基づいてまとめたオルドス回復計畫を陝西三邊總督の曾銃に持ちかける。このいわゆる「復套」計畫は、首輔夏言の支持するところとなり、内閣の後押しを得て強引なまでに推進される。しかし、夏言追い落としを狙う次輔嚴嵩の讒言によって、世宗は突如計畫の中止を命じ、曾銃・夏言も無謀な「復套」計畫を推進した責任を問われて失脚、最後は刑死に追い込まれた。⁽⁴²⁾もともと曾銃に話を持ちかけた呂光は再び行方をくらし、晩年になって徐階の幕客となる。⁽⁴³⁾

當時、徐階は首輔を辭して家居していたが、政敵の高拱が大學士に復歸し、徐階への風当たりが強まると、呂光は徐階の意を受けて、高拱失脚を畫策する。穆宗が崩御した際、呂光は京師に入り、人づてに「新帝は幼いため、太祖の初制にならぬ、親王を宗人令として宗人府を掌らせ、社稷を安んずべし」と高拱に獻策した。高拱が喜んでその策を受け容れると、呂光は「高閣老はすでに牌を發し、自分と關係のよい周王を迎立して自身は國公の地位を得ようとしており、新帝の帝位が危うい」と内廷に振れ回った。これを聞いた兩皇太后はおおいに驚き、狀況を探らせたところ、果たして宗人令云々の話があった。そこで内廷より直接諭旨を下し、高拱を追放したのである。⁽⁴⁵⁾

むろん、以上のエピソードの眞偽を確かめるすべはない。しかし、筆記史料に記された根も葉もない風聞であったとしても、當時の政治世界に特有なある種の雰圍氣を讀み取ることが可能であろう。曾銃・夏言の刑死後に徐階の幕下に入るというように、異なる幕主の間を渡り歩く呂光の行動には、胡宗憲失脚後に高拱の下に參じた邵芳との共通點を見出すことができる。また、呂光が曾銃に賣り込んだオルドス回復計畫が、首輔夏言の後押しを得て、國家の政策として推進されたというのも、政策提言のありようの一端をうかがわせるものと言えよう。在野の人士、しかも恩赦を経たとはいえ、人を殺めた前科者であっても、相應の内容を持つ提言であれば、國家の政策として採用されるような世界が存在したのであ

る。こうした一種開放的とも言うべき政界の状況は、呂光が流したデマが宮中に傳わって兩皇太后を動かす、高拱追放の諭旨が出るという點にも認めることができよう。

首輔を失脚させた政客という點では、嚴嵩失脚に一枚かんでいたという何心隱のエピソードは、政客の活動を考える上で、きわめて興味深い材料を提供する。思想史の方面で特に注目される何心隱は、本名を梁汝元といい、王學左派の泰州學派の中でも、特に急進的な部類に位置づけられている⁽⁴⁶⁾。彼が特に講學活動を重視し、そのために講學の風潮を憎んだ張居正と對立し⁽⁴⁷⁾、獄死という最期を遂げたこともよく知られているが、それと同時に何心隱は、政客としても活發に活動していた。耿定向「里中三異傳」〔耿天臺先生文集〕卷十六には、嚴嵩父子失脚の内幕とその後の何心隱一派の行動について、

尋いで分宜の子、言官の論ずるところと爲りて敗る。或ひと曰わく、狂（何心隱）焉に力有り。蓋し嘗て箕巫を爲す者に授くるに密計を以つてし、因りて宸聰に達するなり、と。其の黨、因りて之を張る。士紳の中にも抑えられて重用せらるるを覩む者有り。貨を傾けて室を授け、其の徒に館穀し、之に藉りて運奇し、奥援を通ぜんとす。

という興味深い記事が残されている。世宗が道教を妄信したことは有名だが、引用文中に見える「箕巫を爲す者」というのは、當時その世宗の寵を受けていた藍道行という方士である。何心隱は藍道行に密計を授け「嚴嵩は奸臣である」という託宣を降させた。信賴する藍道行が下した御託宣とあつて、世宗も嚴嵩への疑いを抱くようになるが、そこへ嚴嵩の息子の嚴世蕃を弾劾する言官の上疏が届いた。普段なら却下される弾劾文ではあるが、このときばかりは世宗も受理し、これによって嚴嵩父子は失脚に追い込まれたという⁽⁴⁸⁾。このエピソードも興味深いものではあるが、より注目したいのは、この後に續く部分である。すなわち、何心隱の仲間が嚴嵩失脚の功を喧傳して歩く一方、嚴嵩執政下で不遇を強いられていた官僚・士大夫の中にも、これを機に好官を得るべく、相應の財をもつて何心隱の仲間を幕下に迎え、獵官運動の策を練つたり、コネを築いたりしようとする者がいたというのである。ここから見る限り、在野の政客と官僚・士大夫との關係

は、前者が一方的に後者に依存するばかりではなく、官僚・士大夫の側も、積極的に政客たちの力を利用するという相互依存の関係にあったと言えよう。

官僚・士大夫の側からのこうした働きかけ以上に、在野の政客が持つ力の大きさを、おそらくもつとも強烈に印象づけるのは、何心隱が張居正によって死に追いやられたという事實であろう。何心隱の死については、講學活動などをつうじて結集された在野の清議を、張居正が弾壓するという構圖で語られ、特に張居正の強権ぶりを象徴する事件とされてきた。確かにそうした理解は全面的に覆されるものではないが、ここではむしろ張居正をそうさせた要因に注目したのである。いわば政府の公式見解を伝える『明神宗實錄』卷九十五、萬曆八年正月己未（十九日）條は、何心隱の獄死を、

是より先、江西永豊の人梁汝元、徒を聚めて講學し、朝政を譏議す。……汝元揚言すらく、江陵首輔、朝政を專制す。必ずや當に都に入り、昌言して之を逐うべし、と。首輔、其の語を微聞し、意を有司に露わし、簡して之を押しむ。有司、風旨を承けて、之を獄に斃す。

と傳えている。何心隱が「京師に入り、首輔を失脚させる」と公言したのを張居正が聞きつけ、有司に意を含めて逮捕させたというこの記事から見えてくるのは、何心隱の言を眞に受けて、彼を投獄せずにはおれなかつた張居正の姿であろう。その背景には、取りも直さず政客の策謀によって失脚に追い込まれることへの危機感が存在したのであり、しかもそれは、きわめて深刻な現実味を帯びたものであつた。張居正ほどの政治家をしてこれほどの危機感を抱かしめた事實こそ、當時の政界における政客の力の大きさを、何より雄辯に物語つていよう。⁽⁴⁹⁾

何心隱の死にまつわる如上のエピソードは、邵芳の位置付けを考える上でも重要な示唆を與えるものである。前章で述べたように、邵芳も張居正の差し金で刑死に至つたが、その他にも兩者の間には共通點が少なくない。たとえば、邵芳を最初に軍師として招いた蔡克廉は、江西提學官在職中の嘉靖二十五年（一五四六）の郷試で、何心隱を第一名で合格させており、邵芳・何心隱ともに、蔡克廉から相應の評価を受けるといふ點で共通していたと言えよう。また、何心隱が公金

詐取の罪名で投獄され、友人の程學顔のはからいで出獄した後、しばらく胡宗憲の幕下にとどまっていたことも知られている。⁽⁵¹⁾

こうした諸點もさることながら、彼らの共通點をもっとも明確に指摘しているのは、これまでも引用してきた王世貞『弇州史料後集』卷三十五の記事であろう。當該記事の中で王世貞は、顔山農・何心隱・邵芳の三人の事跡を記しているのだが、「嘉隆江湖大俠」という表題が端的に示すように、王世貞は彼らの間に「俠」という共通項を見出したのである。「心即理」を推し進めたところに遊俠を肯定する思想が生ずる過程、そしてそれが往々にして既存の體制や權威を否定するものであったがゆえに、爲政者に危険視されたことは、すでに先學によって明らかにされているが、これまで見てきた邵芳の行動にも、そうした要素は色濃く反映されていたと言つてよい。政客として首輔の人事を動かすだけの力を發揮し、かつそこに共通の思想的背景が認められることは、邵芳や何心隱のような人士が、決して單獨で存在していたのではなく、相應の廣がりと浸透力をもつて、政治の世界に確かな位置を占めていたことを示していよう。

おわりに

本稿では、王肯堂『鬱岡齋筆塵』に記された邵芳のエピソードを出發點として、『邵氏宗譜』所收の傳記に依據しつつ、その事跡を跡附けるとともに、彼のような布衣ないし政客といった人士たちの活動について検討してきた。本稿での検討によつて、官僚機構の中に立場を有する官僚のみならず、官の身分を持たない布衣の士も、政治の場で活發な活動を繰り廣げていたことが明らかになった。政客の策謀によつて、官僚機構の頂點に立つ首輔までもが失脚に追い込まれるというエピソードは、彼らが發揮する力の大きさを象徴的に傳えていようが、これらを單なる個別一過性の事例として理解するのは、おそらく適當ではあるまい。邵芳や呂光・何心隱のような事例が、數として一定程度確認できるのはもちろん、邵芳が仕官の口を斡旋する見返りに金品を求めたり、機密を議すために専用の「小屋」を設けたりするなど、いわばプロの

周旋屋として振舞っているのを見ると、彼のような政客の存在は、當時の政治世界の中で、自他ともにそれと認められる立場を確立していたかに見える。そして、そうした世界にあつては、布衣として政治に直接關與する道を意圖的に選擇する者がいても不思議はあるまい。科擧に及第できなかった邵芳、あるいは殺人の重罪を犯した呂光、公金詐取の罪を着せられた何心隱のように、官の身分を得る道を閉ざされた多くの人士にとっては、それもまた、天下のために己が身を挺するという士大夫としての究極の目標を實現する道であつたに相違ない。

こうした政客の存在を支えるいま一つの重要な要素として、官僚層からの要請を見過ごすことはできない。再仕官の斡旋を邵芳に依頼しに行つた士大夫たち、あるいは、好官を得ようとして、嚴嵩父子を失脚させた何心隱やその門生を幕下に抱えようとした官僚たちの例に見られるように、官僚層も政客たちの力を十分に認識し、その力を利用すべく積極的に働きかけていた。呂光が總督曾銃にオルドス回復計畫を賣り込みに行く、ないし何心隱の仲間が嚴嵩失脚の功を喧傳するというような行動も、そうした官僚層の要請を前提としたものと言ふべきであろう。さらに、邵芳が逮捕された胡宗憲につき従い、連座することを厭わなかつたこと、吏部尙書を兼任した高拱の陰で汚れ役に徹したことなどからは、官僚ではできないことを布衣が引き受けるという構圖が浮かび上がってくるであろう。官僚と政客という兩者は、まさに相互に依存しあい、密接不可分の關係をとりながら、政治世界を形成していたのである。

さらに、邵芳の事跡に當時の時代性が色濃く反映されていることも指摘しておかねばなるまい。贅言するまでもなく、邵芳が生きた嘉靖・隆慶という時代、明朝は深刻な内憂外患に見舞われた。「北虜南倭」の外壓が強まる中で、總督胡宗憲や巡撫蔡克廉・胡松・譚綸のように、外敵に直接對峙しなければならぬ督撫にとつて、在野の士とはいえ、兵法を含む諸學に精通した邵芳のような人材は、きわめて貴重な存在であつただろう。こうした優秀な人材を幕下に抱えるには、當然それなりの財政的基盤が必要となるが、「養庵公傳」が記すように、事態の深刻化に伴つて、前線の督撫のもとには中央政府から銀兩が發給されていた。また、特に徽州出身の胡宗憲であれば、商人からの資金も流れ込んでいたであろう。

こうした銀兩の力は、外敵の侵攻に「義憤」を募らせる「豪勇忠智の士」をおおいに惹きつけたに相違ない。おりしも流
行していた心學は、目下の状況に危機感を募らせる人々に、行動を起こすに際しての精神的な據り所を與えるものとして
作用したのであろう。

一方、目を内に轉ずれば、この時期の特徴として、やはり内閣權力の強化と專權首輔の登場とを擧げるべきであらう。
強大な權力を持つ首輔の登場は、官界における「勝ち組」と「負け組」との格差を擴大させたと考えられるが、正面切っ
て政府批判や首輔彈劾の上奏を行っても、却下・譴責されるばかりで、首輔は一向に失脚しないとなれば、「負け組」の
官僚たちの不満も高じ、やがて陰謀によってでも失脚に追い込もうとするのは無理からぬことであらう。そうした状況に
あつては、政客に對する官僚側の働きかけも特に活發に行われただろうし、それに呼應する形で、政客の活動も一層活發
化したに違いない。張居正が深刻な危機感を抱き、邵芳・何心隱を殺さずにおれなかつた理由も、まさにここにある。

こうした内外の不安定な状況は、嘉靖・隆慶年間に限つたことではなく、むしろ萬曆年間以降、より深刻化したと言つ
てもよい。對外關係では、隆慶年間に福建漳州からの出海交易の許可やモンゴルとの和議實現などの政策轉換が圖られた
とはいえ、不安定要素が完全に解消されたわけではなく、その後の内政の混亂・停滯とも相俟つて、邊境問題が再燃する
ようになる。そうした矛盾は、萬曆二十年代のいわゆる「萬曆の三大征」、およびその後の對清戦争となつて爆發し、明
朝を滅亡へと導いたのであつた。内政面でも、強權的な手法によって反對派を抑え込んだ首輔張居正の死後、その反動は
首輔權力の弱體化、そして黨争の激化となつて表れ、官僚の黨争に乗じて宦官魏忠賢が臺頭するなど、政局は收拾すべか
らざる混亂に陥つた。こうして見ると、嘉靖・隆慶期に政客たちの活動を活發化させた要因は、萬曆年間以降、むしろ以
前にも増して強まつたと言えよう。そして、こうした動きに符合するように、萬曆年間には、官僚や邊境の武官のもとに
寄食して流言飛語を振りまく「山人」の盛行が、政治的・社會的な問題としてクローズアップされるようになる。⁽⁵³⁾ 個人の
レヴェルで言えば、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、對日講和に關つて暗躍した沈惟敬のような人物も知られている。とする

ならば、本稿の主人公たる邵芳のような布衣の士であっても、政治を動かす有力なアクターとして存在しうるような、あの種の開放性をもった政治世界は、明代後期という時代をつうじて存在していたと言えよう。

残された問題は、こうした政治世界のありようが、中國政治の傳統の中に如何なる位置を占めるのか、という点である。おそらくは時代や程度の差はあれ、中國政治の流れの中に通時的に存在しており、中國政治の傳統を形作る重要な要素のひとつとして位置づけられるのではないかとの見通しは持っているが、明確な解答を目下の私は持ち合わせていない。詳細は後考にゆだねることとしたい。

註

- (1) 高拱は河南新鄭(現、河南省新鄭市)の人で、嘉靖二十年(一五四一)の進士。嘉靖三十一年(一五五二)八月に裕王講官となり、以後七年半の間、裕王(のちの穆宗)に仕えた。その後、國子監祭酒・禮部尚書を歴任し、嘉靖四十五年(一五六六)三月に入閣するが、隆慶元年(一五六七)五月に辭任。その後、隆慶三年(一五六九)十二月に再入閣を果たし、隆慶六年(一五七二)六月に失脚するまで、吏部尚書を兼任しつつ強力に政局をリードした。以上、高拱の経歴については、櫻井俊郎『隆慶時代の内閣政治——高拱の考課政策を中心に——』(小野和子編『明末清初の社會と文化』京都大學人文科學研究所、一九九六年)二九—三五頁に詳しい。
- (2) この閣内抗争の経緯は、韋慶遠『張居正和明代中後期政局』(廣東高等教育出版社、一九九九年)二一六—二三三頁、姜徳成『徐階與嘉隆政治』(天津古籍出版社、二〇〇二年)二八六—三〇二頁に詳しい。
- (3) 原文は以下のとおり。「隆慶初、大學士華亭徐公(徐階は松江府華亭縣の人)總機務、而新鄭高公負氣不相下。臺省交章論之、高公遂罷。居數歲、徐公亦罷、而興化李公(李春芳は揚州府興化縣の人)當國。時士大夫數人家居、邑邑不得志、欲求復用、與丹陽邵芳商之。芳曰、是固未易圖也。李公以恭默居位、何暇論繩之外乎。公等即欲起廢、誰爲主者、是固未易圖也。諸公曰、雖然、必爲我圖之。芳曰、今新鄭家居久矣。主上以青宮之舊、不能忘情、顧其居約、左右無從與之者。諸公誠各捐千金、芳爲居間、則高公必起。高公起、必重德諸公、而後事可圖也。諸公曰善、乃裝爲遣邵生。邵生以萬金、市諸金寶奇貨、至新鄭高公第、叩關者曰、丹陽布衣邵芳、求見相公門下。高公固不欲、久之乃見、所以接遇之甚倨。立語斯須、高公奇之、乃索坐侍於西隅。復語良久、高公起而握手曰、吾老友也。因實上坐、命酒食盡歡、夜分乃罷辭歸邸。詰旦、邵生復造高公門、不見高公、見其左右曰、始吾聞而公豪傑士、未之信也。昨與

語殆百所聞。曷不出其餘以澤天下、而高臥爲。左右曰、今上左右無推轂者、公即欲不高臥、豈可得哉。邵生曰、吾必欲起公。公強爲我出、我且不別公兩月後、晤於長安邸耳。

- 左右相與目睨之曰、敬諾。邵生即之長安、先使人宣言諸大瑞、東南有大賈、至多奇寶。大瑞爭延致之、邵生固利口、遇之者莫不盡歡、恨相知晚也。邵生有寶刀、長尺餘搏之成。凡大瑞欲得之、問價幾何。邵生笑曰、丈夫意氣相投合、何論貨哉。即解贈之。大瑞喜、日留邵生、款洽有聞、因說曰、今元樞虛、已不任事、而新鄭高公最賢。去不以罪、上以講幄舊宜思之、公等何不從與、令復起而澤天下哉。大瑞曰、謹受教、顧上左右衆、宜捐數千金贈遺之。吾聞、高公貧、安能辦也。邵生曰、吾與高公素昧平生、特爲天下、故言之。信如公言、當盡捐吾囊中裝、爲諸貴人壽。大瑞許諾、不數日而高公果復相、則前家居首謀諸公、頗以次起用。管見の限りでは、三田村泰助『宦官——側近政治の構造——』（中公新書、一九六三年）一九八頁、および同氏『明と清』（河出書房新社、一九六九年）二〇九—二一〇頁で、このエピソードに言及されている。その他、陳寶良『明代幕賓制度初探』（『中國史研究』二〇〇一年第二期）一三九頁でも、高拱の幕賓として邵芳を取り上げている。
- (4) 王世貞『弇州史料後集』卷三十五「嘉隆江湖大俠」、沈德符『萬曆野獲編』卷八「邵芳」。王世貞（一五二六—一五九〇）は嘉靖二十六年（一五四七）の進士であり、沈德符（一五七八—一六四二）は萬曆四十六年（一六一八）の舉人。なお『鬱岡齋筆塵』の「自序」に「余不肖五十、無

開正坐、分心多岐。……時萬曆壬寅（三十年・一六〇二）臘月既望」とあるところから逆算すれば、王肯堂の生年は嘉靖三十二年（一五五三）となる。

- (5) 鄒漪『啓禎野乘』卷八「沈光祿傳」に「夫人邵氏、丹陽邵芳女也。芳任俠、爲江陵（張居正は湖廣江陵縣の人）所殺。族人欺其子幼、欲殺之而分其產、聚而圍守其廬。公集拳勇少年十餘人、爲乞丐裝、毒殺其猛犬、縋墻而入、奪其孤嫠以歸」とある。

- (6) 同前「……出守汀州、闢陂澹泉、教民耘佃、至手農器具以示、真有視民事若家事者。會稅監高宗播磨、特聲討罪微。時宗將自汀入粵、公大書榜示、直達會城曰、稅監將入海從倭。抵汀境、太守當領吏民擊殺之。宗聞、縮舌而止。……大學士葉文忠向高再召入用、采輿論、起陞南光祿少卿、逆奄柄國、又削籍」。

- (7) 小野和子『明季黨社考——東林黨と復社——』（同朋舎出版、一九九六年）巻末の「東林關係者一覽」によれば、『東林點將錄』・『東林同志錄』・『東林朋黨錄』に彼の名が見えるようである。

- (8) 『養庵公傳』に「公生于戊子（嘉靖七年・一五二八）之五月、卒於癸酉（萬曆元年・一五七三）之七月、計年得四旬有六」とある。

- (9) 『明世宗實錄』卷二百四十四、嘉靖十九年十二月壬午（二十五日）條。

- (10) 『明史』卷二百五、唐順之傳には「順之於學、無所不窺。自天文・樂律・地利・兵法・弧矢・勾股・壬奇・禽乙、莫

「不究極原委」とあり、同書、卷二百八十三、羅洪先傳にも「自天文・地志・禮樂・典章・河渠・邊塞・戰陣攻守、下逮陰陽・算數、靡不精究」と見える。

(11) 羅洪先・唐順之の活動やその學問的背景については、中砂明德『江南——中國文雅の源流——』（講談社選書メチエ、二〇〇二年）一三二—一四〇頁を参照。

(12) 「養庵公傳」に「無何、可泉蔡公中丞（蔡克廉の號は可泉）、建牙陪京、督備倭警。奇公名、紹介纁幣、以請公強起、佐戎畫長江以寧」とある。蔡克廉は福建晉江縣（現、福建省泉州市の屬）の人で嘉靖八年（一五二九）の進士。戶部主事・南京禮部郎中などを経て、嘉靖二十三年（一五四四）六月に江西提學官となる。その後、江西巡撫・鳳陽巡撫・戶部右侍郎・南京戶部尚書を歴任した。

(13) 「養庵公傳」に「大司馬梅林胡公（胡宗憲の號は梅林）、尋督師越中、筦鑰半天下、得以便宜、徵辟軍諮。時公方謝蔡中丞、歸奉太孺人壽、而梅林公之使者、相屬追途、車騎虛左、候公於軍門、而北面師事之。公遜避不敏、弗獲、迺許馳驅」とある。

(14) 「養庵公傳」に「公向司馬喜曰、……夫敵狙勝素驕、我屢敗、敵益玩忘備、以驕氣持玩心。我節制攻瑕、可大捷。密授計諸將、陽嚮陰覆、張左右翼、萃於中間、五戰五勝之、遂破周山。敵失險、且奪之魂、我師始生色、人有奮志」とある。

(15) 「養庵公傳」に「徐海」越中擄一民間處子王翠翹、甚嬖。公訪其蹟、密告司馬曰、此女戎也。遂令一部卒、陰計

女父以私通外夷、罪當死。監司執法論獄、司馬特縱之、無所責報。凡三置危法、而全之者三。女父感泣、必欲一死行間、司馬堅不許。有聞、令女父作血書、縫肘帶達其女、密令內間、如指裏伏窺伺。海遂機敗、無所匿、遂坐斃、生降之」とある。茅坤「紀勅徐海本末」（『茅鹿門先生文集』卷三十）によれば、この内通策は嘉靖三十五年（一五六〇）、浙江桐鄉（現、浙江省桐鄉縣）にまで攻め込んだ徐海・陳東・葉麻を離間させるためのものであり、「……數遣謀持簪珥・瓊翠、遺海兩侍女、日夜說海并縛東。海既誅」と見え、やはり徐海の「侍女」を内通させたとされている。茅坤は二人の侍女の名前も「兩侍女者王姓、一名翠翹、一名綠妹」と傳えている。

(16) 「養庵公傳」に「公與司馬謀曰、直僅釜中鱗耳、然猶擁萬衆齊死生、未可以力縛也。直倖托司馬桑梓鄉、盍誘之通侯賞、俾得自効贖罪。厚設城府、多爲間諜、直且信而飼我香餌、一武夫力耳。司馬稱善、卒用公言、僞請鑄印、馳節使授茅土、調守北邊。直乃以單車就徵、不尋斧柯屠士卒、越境甫有安生之樂」とある。

(17) 『五忠堂平倭實錄』は全四巻、北京大學圖書館・中國科學院國家科學圖書館などに明鈔本が傳わる。筆者が披閲した中國科學院國家科學圖書館所藏本に収録されている徽州出身の洪文衡が萬曆年間書いた序文には、本書編纂の経緯が「公（胡宗憲）孫燈、舉孝廉而蚤世、不及與纂述之事。其弟煜、資不逢世、既老諸生間、憤藏梓之無完本、而先烈之弗光也、彙輯之而稍芟其繁、勒爲家乘、以俟百世後信史

之蒐采、名之曰五忠堂平倭實錄」と伝えられている。

- (18) 『籌海圖編』卷十一上「足兵餉」、卷十一下「調客兵」、卷十二上「嚴城守」に「丹陽邵芳云……」という形で邵芳の言が引かれている。

- (19) 「養庵公傳」に「公曰、……請以所錄文武将吏、得縱寬目焉。於是、文吏若二華譚公（譚綸の號は二華）・柏泉胡公（胡松の號は柏泉）、武吏若戚公繼光・劉公思顯・俞公大猷等、並謁公于行幕、以聽調遣」と見える。

- (20) 張璉については、佐久間重男『日明關係史の研究』（吉川弘文館、一九九二年）三〇四―三〇五頁を参照。

- (21) 胡松の江西巡撫起用は『明世宗實錄』卷四百九十九、嘉靖四十年七月壬子（二十四日）條に見える。彼はその直前の七月十六日に、浙江右布政使から江西左布政使に遷ったばかりであった。胡松が張璉らの鎮壓を命ぜられたことは、羅洪先「大中丞栢泉胡公平寇序」（『念菴羅先生集』卷四）に「嘉靖辛酉（四十年・一五六一）、疆場不戒、閩廣盜逸虔吉、禍變卒起、不及籌措。天子震怒、乃擇今大中丞栢泉胡公、經理軍事」とある。

- (22) 「養庵公傳」に「公曰、璉蟻聚烏合、其衆易離、可以先聲奪之。中丞公名威素著、若傳檄稱十萬衆、日暮且集、璉部多虛、聞大將王師至、驚破其膽、衆必瓦解、請繫長纆。……中丞謝曰、聞公言、越寇在五學中矣。璉衆果傳檄而定」とある。

- (23) 胡松の南京兵部尙書就任は『明世宗實錄』卷五百五十三、嘉靖四十四年十二月戊子（二十五日）條に、吏部尙書就任

は同書、卷五百五十七、嘉靖四十五年四月丙寅（五日）條に、それぞれ見える。

- (24) 譚綸の福建巡撫起用は『明世宗實錄』卷五百十九、嘉靖四十二年三月庚辰（二日）條に見える。

- (25) 『明史』卷百十、宰輔年表二、参照。

- (26) 『明史』卷百十二、七卿年表二によれば、董份は嘉靖四十四年（一五六五）四月より六月まで禮部尙書に、馬森は隆慶元年（一五六七）六月より隆慶三年（一五六九）二月まで戸部尙書にそれぞれ在任している。また張英聘「明代南京七卿年表簡述」（朱如誠・王天有編『明清論叢』第六輯、紫禁城出版社、二〇〇五年）によれば、秦鳴雷は隆慶五年（一五七二）五月より翌六年（一五七三）十二月まで南京禮部尙書に、凌雲翼は萬曆六年（一五七八）十月より翌七年（一五七九）四月まで南京工部尙書をつとめた後、南京兵部尙書に遷り、萬曆八年（一五八〇）六月まで在任した。

- (27) 「養庵公傳」には「公固少所折節、而一時縉紳名公、以道義相納者、不能悉舉、具見公家刻中。罹難時、稿多散失、爲仇家所燼滅、僅存什一于千百、可概公生平焉」とあり、家刻所收の原稿は、邵芳が逮捕・死刑になった際に大部分が焼失してしまったという。

- (28) 錢鏐は五代十國のひとつ吳越の太祖武肅王のこと。羅隱は錢鏐の幕下にあった詩人で『舊五代史』卷一百三十三、錢鏐傳に「江東有羅隱者、有詩名、聞於海內、依鏐爲參佐。鏐嘗與隱唱和、隱好譏諷、嘗戲爲詩、言鏐微時騎牛操槌之

- 事。鏐亦怡然不怒、其通恕也如此」とある。
- (29) 「黄石」とは、黄石公が張良に與えたと傳えられる『黄石公三略』という兵法書のこと。ここではこの故事を踏まえて、兵法書ないし兵事を指すのであろう。
- (30) 沈德符『萬曆野獲編』二十三「恩詔逐山人」に「按、相門山人、……華亭有沈明臣」とある。
- (31) 註(11)前掲中砂明德著書、四四頁を参照。
- (32) 胡宗憲幕府と徽州人脈との關係ということでは、周蕪『徽派版畫史論集』(安徽人民出版社、一九八四年)二七頁で述べられているように、『籌海圖編』の初刻本(嘉靖四十一年序刊本)が徽州歙縣虬村出身の黃氏によって刻刊されていることを指摘しておきたい。虬村黃氏については、大木康『明末江南の出版文化』(研文出版、二〇〇四年)七九―八六頁を参照。また、岩井茂樹「十六世紀中國における交易秩序の模索——互市の現實とその認識——」(同氏編『中國近世社會の秩序形成』京都大學人文科學研究所、二〇〇四年)一二九―一三〇頁では、胡宗憲による王直招撫策の背景に、商人を介在させることで朝貢・海禁體制と對外貿易とを兩立させようとする互市の構想があったと述べられている。なお、註(3)前掲陳寶良論文、一三九頁でも引用されている史料だが、福建晉江出身の張維樞『澹然齋小草』卷十二「觀靜軒瑣言」に「邵樛朽、乃駟驗之豪者」とあり、邵芳がプロローカーであったと記されている。あるいは邵芳の入幕じたいも、商人のネットワークを背景としたものだったのかもしれない。
- (33) 『明世宗實錄』卷五百十五、嘉靖四十一年十一月丁亥(七日)條。
- (34) 『明世宗實錄』卷五百十六、嘉靖四十一年十二月丁丑(二十七日)條では、胡宗憲を釋放して閑住させるという上諭が出されている。
- (35) 魯仲連は戰國齊の人。非凡な畫策を好み、節を持して仕官しなかったが、他人のために喜んで困難を解決したり、調停役を買って出たりしたという。『史記』卷八十三に立傳されている。
- (36) 「養庵公傳」に「世廟時、公嘗爲梅林公、代所著作、首當上意。高相國讀、而亟稱之曰、奇才奇才。詰所由、知出公手、相國固已心折公、而思締交矣」とある。
- (37) 「養庵公傳」に「公以一布衣、與之(胡宗憲)連坐、無所避諱。新鄭益大奇之、請終身事之。傾蓋披肝、立就親暱、莫可間」とある。
- (38) 河南洧川(現、河南省長葛市の屬)出身の范守己「曲洧新聞」卷四(『御龍子集』卷二十四)に「陳洪者、許昌人。……積官至司禮監監正、隆慶初、掌司禮事、權傾中外。新鄭高拱當國時、相得驩甚」と見える。
- (39) 當該傳記は丹陽出身の賀復徵の手になるもので、「崇禎歲次丙子(九年・一六三六)孟春穀旦」の日附がある。
- (40) 張佳胤は嘉靖二十九年(一五五〇)の進士で、隆慶五年(一五七二)十月より萬曆元年(一五七三)二月まで應天巡撫をつとめた。邵芳の死について「養庵公傳」には「及新鄭再擯、而江陵難始作。江陵側目華亭扼咽、而里中二

豪強有力者、陰爲大羅、綱密科條、務在深文峻刑、速公死論公族」とあり、張佳胤の關與については言及されていないが、王肯堂『鬱岡齋筆塵』卷二、沈德符『萬曆野獲編』卷八「邵芳」、王世貞『弇州史料後集』卷三十五「嘉隆江湖大俠」は、いずれも張居正が張佳胤に意を含めて邵芳を死に追いやったとする。

(41) たとえば「乾隆歲次丁未（五十二年・一七八七）嘉平月吉」の日附がある賀萬里「贈禹智邵生序」（『邵氏宗譜』卷二）は、邵芳から數えて六代目にあたる邵克恭の傳記であるが、そこには「禹智邵生、養庵公第六世孫也。隱跡田畝、以耕稼自終。然窺其志、每歎養庵之卒不終、子孫之業不振、欲以培植元氣、而紹家聲。……養庵之裔、必有興者、其在斯乎」とあり、布衣であつた邵克恭を語るに際して、邵芳の後裔であることが強調されている。

(42) 以上、曾銑の「復套」計畫をめぐる政治過程については、拙稿「明嘉靖「復套」考」（『集刊東洋學』九八、二〇〇七年）において検討したことがある。

(43) 沈德符『萬曆野獲編』卷八「呂光」に「呂光者、浙之崇德人。……少嘗殺人、亡命河套、因備知阨塞險要。遇赦得解、走京師、以其復套策、于曾石塘（曾銑の號は石塘）制臺。曾以聞之夏貴溪（夏言は江西貴溪縣の人）、夏大喜、因議舉兵出蒐、如呂謀。分宜（嚴嵩は江西分宜縣の人）以挑釁起禍、聞之世宗、兩公俱死西市。晚年、游徐華亭門、爲人幕客」とある。

(44) 宗人府とは玉牒の纂修をはじめとする皇族關係の事務を

掌つた役所である。洪武二十二年（一三八九）正月の設置當初は、秦王を宗人令に、晉王・燕王・周王・楚王をそれぞれ左宗正・右宗正・左宗人・右宗人として府事を掌らせたが、永樂年間以降は勳戚を宗人令として專官を置かず、實際の事務は禮部の所轄となつた。

(45) 沈德符『萬曆野獲編』卷四「論建藩府」に「穆宗初崩、新鄭當國。時有大俠、名呂光者、爲故相華亭所遣、行間於京師、因別遣客、以奇計干新鄭謂、主少國疑、宜如高皇初制、命親王爲宗人令、領宗人府、以鎮安社稷。新鄭大喜、納其謀。呂又宣言於內廷云、高閣老已遣牌、迎立所厚周王入紹、身取世襲國公、新帝位不安矣。兩宮大駭偵知、果有宗人之說。遂從中出旨、立逐新鄭」と見える。なお、ここで言う「兩宮」とは、穆宗の皇后であつた仁聖皇太后陳氏と、神宗の生母である慈聖皇太后李氏のことである。

(46) 容肇祖「何心隱及其思想」（『輔仁學志』六一・二、一九三七年）、島田虔次著・井上進補注「中國における近代思惟の挫折」（平凡社東洋文庫、二〇〇三年。初出は一九四九年）、森紀子「何心隱論——名教逸脫の構圖——」（『史林』六〇—五、一九七七年）などを参照。

(47) 張居正の講學彈壓については、中純夫「張居正と講學」（『富山大學教養部紀要（人文・社會科學篇）』二五—一、一九九二年）に詳しい。

(48) このエピソードそのものは、註(46)前掲容肇祖論文、一二頁、同島田虔次著書、第一冊一八二頁、同森紀子論文、二九頁でも言及されている。

- (49) 張居正が何心隱の政客のような行動を恨んで殺害したとの見解は、つとに章炳麟（太炎）よって示されている。章太炎講演・曹聚仁整理『國學概論』（上海世紀出版集團、二〇〇八年再版本）四〇頁を参照。
- (50) 註(46) 前掲容肇祖論文、一頁、参照。
- (51) 註(46) 前掲容肇祖論文、七―九頁、同島田虔次著書、第一冊一八一頁、同森紀子論文、二九頁、参照。
- (52) 註(46) 島田虔次著書、第一冊一八九―一九三頁。
- (53) 萬暦年間の「山人」の流行については、金文京「明代萬暦年間の山人の活動」（『東洋史研究』六一―二、二〇〇二年）に詳しい。

【附記】 本稿において利用した『邵氏宗譜』は、當初未修復であったが、筆者の依頼により修復作業が行われ、二〇〇八年六月にはじめて閲覧がなされたものである。筆者の依頼に應じ、急ぎの修復を進めていただいた上海圖書館譜牒研究中心の方々に、深甚の謝意を表す。

本稿の内容は、二〇〇八年十一月三日に開催された二〇〇八年度東洋史研究會大會における口頭報告の内容をもとにしていゝる。報告の機會を與えていただいたことに感謝するとともに、席上、貴重な御意見・御批評を賜った諸先生方に、厚く御禮申し上げます。

なお、本稿は平成二十一年度文部科學省科學研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

nam. Although the Zongli Yamen was conscious of this “error,” it responded with a message that the Yunnan troops would not be allowed to cross the border. De Rochechouart spuriously reported to his government that the response was an acceptance of the demand for troop withdrawals. Thereafter, the Qing army completed its campaign in Tonkin and withdrew in accordance with its own pre-determined policy. Regarding its own position satisfied, France took a stance maintaining the status quo and viewing the relationship between Qing and Vietnam as a “ritualized” ceremonial one. This led to relations between China and France that continued under a state of “mutual miscomprehension.” However, later events forced the Qing government to once again dispatch troops and that resulted in the French reaction that subsequently developed into the “l’affaire du Tonkin.”

In researching this article, I have been able to prove that the mistranslation, which has been thought to be an error leading to war, was in fact a deliberate act intended to avoid the conflict.

**A CONSIDERATION OF SHAO FANG, A COMMONER
OF DANYANG: THE POLITIQUES
OF THE LATE MING AS SEEN
FROM THE ACTIONS
OF A POLITICIAN**

JOHCHI Takashi

The *Yugang zhai bi zhu* 鬱岡齋筆塵 of the scholar Wang Kentang 王肯堂 from the Wanli era (1573-1620) contains an episode about the return of Gao Gong 高拱, who had been senior grand secretary 首輔 during the Longqing era (1567-1572), to office for the second time. The episode involves the “commoner” 布衣 Shao Fang 邵芳 from Danyang (present-day city of Danyang in Jiangsu). Officials who were out of office and had retired to their homes sought Shao Fang’s intercession. He was able to respond to their demands by using the money he received from them to fund their return through connections with eunuchs, and thus he realized Gao Gong’s political revival. Taking this incident as its starting point, this article details Shao Fang’s achievements on the basis of the *Shao shi zongpu* 邵氏宗譜,

which is found in the Shanghai library, and considers how the activities of a politician outside the government had sufficient influence to greatly impact the political situation for a time. Through this examination, I attempt to portray in detail the political world of the late Ming.

The multi-talented Shao Fang abandoned a career as an official after failing in the examinations and chose to make his livelihood as a commoner. He read through books of all genres and devoted himself to various disciplines, including military tactics. His services were acquired by the governor general 總督 Hu Zongxian 胡宗憲. He effectively exercised his talents while serving in Hu Zongxian's headquarters in operations against the Japanese raiders, and using his relationship to the officials in Hu Zongxian's headquarters as foothold, he built a wide-ranging network of relationships in the bureaucratic world. He later served under Gao Gong, operating actively as a special advisor, and he also operated as his agent carrying out the dirty work of the bureaucrats. After Gao Gong was ousted, his rival Zhang Juzheng 張居正 fearing the political influence of Shao Fang pressed for his execution.

The existence of a commoner politicians like Shao Fang who could exercise power great enough to drive a senior grand secretary from office can be confirmed from a number of contemporary sources. Armed with the spirit of gallantry in less than optimal circumstances during a period of internal distress and external troubles, they occupied a firm position in the political realm of the day. The bureaucratic class also fully recognized their power and actively exploited it. The free-wheeling nature of this political world can be described as special characteristic of the late-Ming politics.

INVASION OF THE RYŪKYŪ KINGDOM AND JAPANESE AND MING RELATIONS

WATANABE Miki

The Ryūkyū kingdom was defeated in the invasion of 1609 by the Satsuma domain of the Shimazu clan, with the result that the kingdom came to be brought into the political orbit of Tokugawa Japan, while maintaining its tributary relationship with Ming China that had been in place since the latter half of the 14th century. As has been made clear in previous research, the chief goal of the invasion